

# 続・ 珈琲の思い出 32

鈴木優子

優子はタクシーの車内で化粧ポーチを取り出し、すばやく化粧を整えた。特に赤く火照った頬には念入りにパウダーをはたいて、緊張でカラカラに乾いてしまった唇にもグロスを足した。

家の前でタクシーを降りると、深呼吸をひとつして、

何事もなかったかのような顔をして微笑む練習をした。

玄関のドアを開ける。

「ただいま」

「優子ちゃん、おかえりー。」

夫の義弘が上機嫌で出迎えに来た。

「ごめんね、遅くなっちゃって。子供たちはどうしてる？」

言い終わらないうちに、義弘がいきなり優子を抱きしめてきた。

「ちよっ・・・!?」

「今日の優子ちゃん、何だか可愛いね。それに結構お酒くさいぞ。」

そう言つて唇を近づけてくる。

「ちよっ、やめてよ。あなたこそかなりお酒臭いわよ！」

聞こえなかったかのように、唇を重ねてくる義弘。

「・・・ん。もう、やめて・・・」

折角の和樹の余韻が汚(けが)されたような気がして、優子は思わず眉間に皺を寄せて抵抗した。

すると、それを好意の証拠と受け取ったのだろう、義弘はさらに、優子の口の奥に舌を差し込んで来た。

「もう、いやなの・・・」涙ぐむ優子。

義弘の手が優子のスカートの中に侵入してきて、さらに優子のストッキング越しに優子をまさぐろうとしてきた。(続く)